

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六 落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録す

す

其の一

【原文・書き下し文】

- | | |
|--------------------------------------|-------------------|
| 1 諸寺樓臺掛 _ニ 夕霏 _一 | 諸寺の楼台 夕霏掛かり |
| 2 疎鐘隱隱苑花飛 | 疎鐘隱隱として苑花飛ぶ |
| 3 綠煙抹去山添黛 | 綠煙抹い去れば山 黛を添え |
| 4 紅雨滴來苔染衣 | 紅雨滴り来たりて 苔衣を染む |
| 5 燕自多情應 _レ 節至 | 燕 自ら多情にして節に應じて至り |
| 6 雁元何意負 _レ 春歸 | 雁 元何の意か 春に負きて歸る |
| 7 可憐遊子無 _ニ 消息 _一 | 可憐 遊子消息無く |
| 8 南浦幾家人倚 _レ 扉 | 南浦 幾れの家の人か 扉に倚るらん |

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

- 1 ○●○○○●●◎
2 ○○●●●○○◎
3 ●○○●○○○●
4 ○●○○○○○◎
5 ●○○○○○●●
6 ●○○○●○○◎
7 ●○○○●○○●
8 ○●●○○○●◎

七言律詩

『広韻』上平八微(霏・飛・衣・歸・扉)。『平水韻』上平五微。

【校勘】

『清狂遺稿』以外に参照すべきもの無し。

【現代語訳】

落花のうた三十首 叔父の龍護の詩に次韻する 六首を採録
寺々の高楼に夕暮れの霏がかかり、間を置きながら聞こえてくる鐘の音もかすかで庭には花が

舞い散っている。

緑の葉を覆っていた靄が消え去ると山々も黛の色濃く、赤い花から雨の雫が滴り落ちて苔を緑の衣に染め上げる。

燕はもともと情深いものでこの季節になってやってくるが、雁はそもそもどうして春を後にして戻ってゆくのか。

哀れなことよ、旅にある人からの便りもなく、南浦で扉に寄りかかって帰りを待ち望んでいるのは誰であろう。

【解題】

この組詩「連作詩」六首は、天保五年（甲午 一八三四）、月性十八歳、豊前の蔵春園での作。明治二十五年（一八九二）、月性開設の私塾、時習館で学んだ大洲鐵然・天地哲雄が編纂した『清狂遺稿』はこの詩題に〈以下甲子の作〉と注を附しているが、〈甲子〉は文久四年（一八六四）二月二十日以降は元治元年で、安政五年（一八五八）に逝去した月性が作ることは不可能である。『清狂遺稿』冒頭の詩「秋晚香」（月性の竹馬の友、秋元晚香）に懷いを寄す（寄懷秋晚香）詩の題注には〈天保癸巳（一八三三）、師年十七歳、豊前の梨花寮（蔵春園の寄宿舎）に寓す（天保癸巳、師年十七歳、寓于豊前梨花寮）とあり、七番目の「平安」詩の題注には〈以下乙未（一八三五年中の作）とあるので、それらの間に置かれるこの組詩は、甲午（一八三四）の作ということになり、『清狂遺稿』に記される〈甲子〉は〈甲午〉の誤りである。

この組詩は、月性の叔父にあたる龍護（一七九四？大坂長光寺住職、寛応の別号）が行く春を惜しんで詠んだ「落花吟三十首」の中の六首について、同じ韻字でしかも同じ順序で詠むという次韻の詩で仕立てられている。つまりこの組詩の其一についていえば、元歌である龍護の詩も〈飛〉・〈飛〉・〈衣〉・〈歸〉・〈扉〉という韻字を用いているのである（其二以下の詩についても【平仄・詩型・押韻】の◎の印のある字を参照）。この詩は、従来、龍護が月性の叔父であるということから、月性が個人的に作ったもののように見られているが、其六の最後に付した【補説】で述べるように、蔵春園で学ぶ塾生たちにも同じ題の次韻詩があることから、花の散りゆく晩春を題材に、しかも次韻詩というかなり難しい詩形で蔵春園の塾生たちが共有して挑んだも課題詩であることがわかる。

もともとこの「落花吟」三十首については、明の沈周（字は啓南、号は石田）が「落花詩」を全部で三十首を作って、それに文徵明・唐伯虎・徐昌国といった当時の著名な文人たちが和して応酬したというのが、我が国でもよく知られた風流事であり、京都の中島棕隠（1779-1855）も上記の四人の詩に自身の詩三十首も加えて『明賢咏落花詩』（文化十五年一八一六引）を出版しており、龍護もそれに影響されての創作であつたろう。

これらの六首の組詩は、いろいろな視点から、時にリアルに、時に想像をまじえて、行く春の寂しさを中国の典故を交えながら詠む内容となっている。

【語釈】

〇龍護 月性の叔父で、名は覚応、字は子感、号が龍護、または龍山。大阪の長光寺（大阪市中

央区島町二二一九）の住職。詳しくは海原徹『月性』（二〇〇五年、ミネルヴァ書房）第七八頁及び

四四頁以降参照。 **1・2** 至つて閑静な情景を〈諸寺〉〈夕霏〉〈苑花〉で視覚的に、〈疎鐘〉

で聴覚的に描写する。 **1樓臺** 高い建築物、高殿。唐、杜牧「江南春絶句」詩に、かつて文化

的繁栄を誇つた南朝時代の数多くの寺の楼台をまぼろしの如く見て、〈南朝四百八十寺、多

少の楼台 煙雨の中（南朝四百八十寺、多少樓臺煙雨中）〉と詠む。

掛夕霏 夕もやが掛かる。明、

胡応麟「叢芳館（叢芳館）」詩に〈暈嶺（折り重なる山々）高く盤りて夕霏挂かり、雲光霧色乱り

に衣を侵す（暈嶺高盤挂夕霏、雲光霧色亂侵衣）〉。 **2疎鐘** 間隔を置いて撞かれる鐘。「春曉殘夢

（春曉殘夢）」詩（『清狂遺稿』上二九歳）に〈眠りに困しみ枕に倦みて「寝付かれず」紗窓（薄絹のカーテ

ンの掛かった女性の部屋の窓辺）に倚れば、覚えす疎鐘の暁を報じて撞くを（困眠倦枕倚紗窓、不覺

疎鐘報曉撞）〉。 **隱隱** 鐘の音が遠くからかすかに響いてくるさま。中島棕隱（一七七九—一八五五）

「己卯（一八一九）二月、弊社（自分が主催する詩社）に小かに集りて春曉を以て詩題と為す。余偶

ま三都（江戸・難波・京都）の旧遊を憶うこと有りて、因りて各の景趣（三都での興趣）を共にせし

を撮りて、此の三絶（三首の絶句詩）を賦す（己卯二月、弊社小集以春曉爲詩題。余偶有憶三都之舊遊、因

各撮共景趣、賦此三絶）というの中の「角田川」詩に〈疎鐘隱隱として声初めて動き、徐ろに金龍

山色の間（浅草寺のあたり）を度る（疎鐘隱隱、聲初動、徐度金龍山色間）〉。 **苑花** 庭園に咲く

花々。 **3・4** 第三句の遠くに見遣る〈山〉から、第四句の目の前の〈苔〉へと視点を転ず

る。『清狂遺稿』上冊には、広島藩の碩学、坂井虎山（1798-1850）の〈三四は妙対（第三句と第四

句は絶妙な対句である）（三四妙對）〉という評語がある。 **3綠煙** 緑の葉にかかるもや。〈緑〉は、

第四句の花の〈紅〉と対を成して葉の〈緑〉をいう。〈煙〉は、〈烟〉と同じく、大気中の細かい

水滴によつて遠方をかすませる霞・靄・霧・霧・煙雨といった類いのもので、春の詩語として使わ

れることが多い。「春游」詩（『清狂遺稿』上二二歳）に〈垂楊 雨を経て 参差として（柳の枝が

長短ふぞろいなさま）緑なり、芳草 煙を牽きて 遠近勻し（垂楊經雨參差綠、芳草牽烟遠近勻）〉、「春

曉雨寒 鬪りて韻の寒を得たり（くじで「春曉雨寒」の中で「寒」の韻で作詩することを引き当てた）（春

曉雨寒 鬪得韻寒）詩（『清狂遺稿』上二三歳）に〈芳草池塘 春夢湿い、落花風雨 曉眠寒し（芳

草池塘春夢濕、落花風雨曉眠寒）〉、「春詞十首」其二（『清狂遺稿』上二四歳）に〈須いず枉しく池塘の

夢（南宋、朱子「偶成」詩の〈少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず。いまだ覚めず池塘春

草の夢。階前の梧葉已に秋声（少年易老學難成、一寸光陰不可輕。未覺池塘春草夢、階前梧葉已秋聲）〉に基

づく」を結ぶを、詩思 芳草の煙より濃やかなり(不須枉結池塘夢、詩思濃於芳草烟)。 抹去 (靄が)ぬぐわれるように消え去る。 山添黛 墨のような山々の色がいつそう映えてくる。 4 紅

雨 紅い花に降る雨。唐、孟郊「同年春宴(同じ年に科挙に合格した者たちの為に催される春の宴)」(同年春宴)詩に「紅雨花上に滴り、緑煙 柳際に垂る(立ち籠める)(紅雨花上滴、緑煙柳際垂)」。 苔

染衣 苔を衣に見立てて、それが雨の雫に濡れて鮮やかな緑色に染め上げられているかのようだという。北宋、梅堯臣「劉原甫の復び雨ふりて永叔に寄するに和す(劉原甫が再び雨が降ったことを詩にして歐陽永叔に送ったのにさらに唱和する)」(和劉原甫復雨寄永叔)詩に「階下の青苔 衣を染

めんと欲し、晴光纔かに漏れ又た霏微たり(小雨のけぶるさま)(階下青苔欲染衣、晴光纔漏又霏微)。 5 自多情 情感が深い。《自》は、次の句の《元》と同じく、本来、そもそもという意。《多情》は気が多く、移り気なことで、ここでは《燕》が一ヶ所に留まらない渡り鳥であることをいう。

唐、裴説「牡丹」詩に「遊蜂と蝴蝶、来たり往きて自ら多情なり(遊蜂與蝴蝶、來往自多情)。 應節 その季節に合わせる。『礼記』『月令』に「仲春の月(旧暦二月)……玄鳥(燕)至る(仲春之月……玄鳥至)」とあるように、燕は旧暦の春にやってくるかとされている。 6 何意 いったい

どういう訳なのか。「春雨に感ずる有り(春雨有感)」(『清狂遺稿』上二三歳に「雲 元 何の意か徒らに日を遮り、雨 更に無情にして謾りに花を打つ(雲元何意徒遮日、雨更無情謾打花)」。 負

春 せつかくの春という良い季節を裏切る。梁川星巖(二七八九―一八五八)「大槻瑞卿の仙台に帰省するを送る(送大槻瑞卿歸省仙臺)」詩(『星巖丁集』巻五)に「満城の羈綺(都会全体が人々で賑わって

いる)春に負きて還る、東に指さすは金華 是れ故山なり(滿城羈綺負春還、東指金華是故山)」。 7

可憐 あわれに思われる。 遊子 故郷を離れて異郷にある者。元、胡助「春草曲」(「憐むべし遊子萍(浮き草) 相似たり、春愁 草緑 千万里(可憐遊子萍相似、春愁草緑千萬里)」。 消息 便

り。唐、杜甫「李白を夢む二首(夢李白二首)」其の一に「死別(死に別れ) 已に声を吞むも、生別(生き別れ) 常に惻惻たり(悲しむさま)。 江南は瘴癘(伝染性の熱病)の地にして、逐客(反乱に加担したかどで追放された李白) 消息無し(死別已吞聲、生別常惻惻。江南瘴癘地、逐客無消息)」。 8 南浦 南

の浦。『楚辞』『九歌』の「河伯」に「子(河伯を指す) 手を交えて(手を取りあって別れる) 東に行き、美人(自分を指す)を南浦に送る(子交手兮東行、送美人兮南浦)」と詠まれたことから別れの象徴的場として詩語に用いられるようになり、梁の江淹「別れの賦(別賦)」にも「春草碧色、春水淥波

「清い波」、君を南浦に送れば、傷ましきこと之を如何せん(春草碧色、春水淥波、送君南浦、傷如之何)などとある。 幾家人 どこの人、誰。「幾家」は、「何処」と同じでどこ。唐、劉長卿「崔昇の

上都(都の長安)に帰るを送る(送崔昇歸上都)」詩に「早鶯(早春に鳴く鶯) 何れの処の客ぞ(相手の崔昇をいう)、古木 幾れの家の人ぞ(劉長卿自身をいう)(早鶯何處客、古木幾家人)」というのは、倚扉 人の帰りを待つて門の扉に寄りかかる。 宋、張方平「齊魯道中に睢陽を望みて念う有

り（齊魯道中望睢陽有念）詩には（遙かに知る 梁国（故郷の睢陽のある地方）白雲の下、此の際（この時）吾が親（親しい人） ひとり扉に倚るを（遙知梁國白雲下、此際吾親獨倚扉）と旅行く人を思つて扉に寄りかかっている。

この詩について、『清狂遺稿』上冊には、佐賀藩弘道館教授、武富圯南（1806-1875）の（余時に此の詩を愛するは、其の章法（作詩のルール）を失わざるを以てなり（余時愛此詩、以不失其章法也））という評語を載せる。